

佐賀県立博物館・美術館報

佐賀県重要文化財

四段積上式経筒

出土地 神埼郡脊振村大字服巻字脊

振山一三五八番地 脊振山

一号経塚 高さ四四・三cm

大きさ 筒部外径九・三cm

材質 銅製鋳造品

年代 平安時代後期（一二世紀前半）

所蔵者 脊振村教育委員会

一〇五五・二mの山頂付近で、半壊した経塚の中から偶然発見されたものである。全体の形は宝塔を模したものと言われ、相輪鉢を有する伏鉢状の蓋 同一規格の四個の円筒、二段式台座の六個の部品より構成されている。そしてそれぞれの表面には三条ないし四条一組の細沈線を等間隔に巡してある。全体に厚みは一mm程度であり、鋳造挽物の最高水準を示している。

この種の積上式経筒はこれまでに北部九州を中心に四三例が知られているが、円筒部の支持方法については不明な点が多い。本例の場合、一八巻の紙本経がぎつしりと納入され、それだけでも十分支持可能な状態であつた点注目される。

8月2日より本館常設展にて公開予定。



目 次	○佐賀県重要文化財四段積上式経筒（脊振村出土）	表紙
	○博物館資料紹介	2 ~ 3 頁
	○九博協講演要旨「博物館に期待する」 筒井泰彦氏	4 ~ 6 頁
	○美術館アンケート調査から	6 ~ 7 頁
	○お知らせ	8 頁

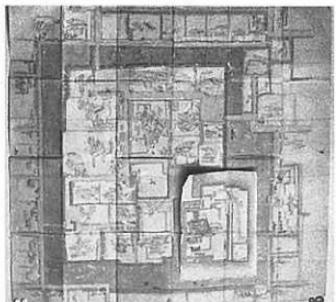
資料紹介

佐賀城内絵図（福田和禾子氏寄託資料）

昭和63年3月、東京都目黒区碑文谷の福田和禾子氏の御好意により9点の資料の御寄託をいただいた。佐賀城内絵図4点と養父郡図、三根郡綾部郷山方絵図、唐津街道図など史料として貴重なものである。

今回は、佐賀城内絵図について紹介したい。

1. 慶長小城内絵図



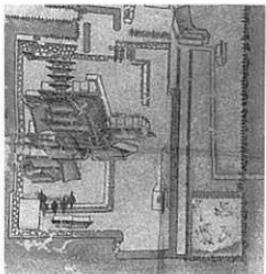
91.5×10.0cm

慶長16年（1611）に完成した佐嘉城の創建当時の様子を物語る絵図である。本丸には天守台上に五層の天守閣が建ち、瓦葺きの建物もある。瓦葺きの建物は本丸のみで、他は桧皮葺、もしくは板葺屋根と考えられ、なかには茅、もしくは藁葺の屋根もまじっている。城内を水路が多く施す川の水を利用して北西の方向から東、または南に流れ、城内をめぐる内濠の土手には松が植栽されていることがわかる。内濠をへだてて城内への通路は4か所あるが、南からの通路はなく、本丸への通路は狭く作られている。

なお、本丸の東南の隅に囲いを設けて飼育されている鳥が描かれている。これは本丸の一隅で鳥を飼育して楽しんだものと考えられる。この絵図が作成された当時の藩主である鍋島勝茂が鳥を飼育して楽しんだ様子については、蓮池鍋島家文書の中で、勝茂が子の直

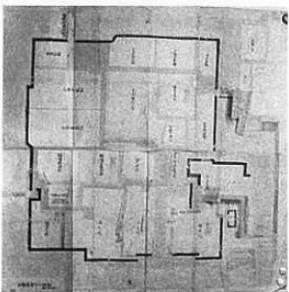
澄にあてた書状の中で、真白の羽毛を持つ山鳥や雀、南京鳩、高麗きじなどの珍しい鳥を代金、もしくは刀や焼物と交換に入手するよう依頼している。その書状の中でさらには、「国元にて別に慰みこれ無く候条、庭籠を仕り、見申すべしと存じ候」として、佐賀ではほかに慰みもないので鳥を飼って慰みとしたいとしている。勝茂の趣味を知ることができる。また、この書状の中に、「鶴・孔雀は罷り成らず候間」として鶴・孔雀の飼育は行なわないと言っている。鶴の飼育は難しく、また禁鳥でもあったので一般には禁じられていた。当時は大名などの趣味として珍しい鳥が飼われていたが佐賀城内でもかなり広い空間をしめる鳥小屋が設けられ、藩法（鳥ノ子帳）の作成などで忙殺された勝茂が心の安らぎを得たものと考えられる。

鳥屋の図



一城の東南の隅で飼われている。—

2. 御城内絵図



79.0×79.0cm

慶安2年(1649)に作成された城内絵図の写である。本丸、二の丸、三の丸、西の丸が記載され、さらに城内に佐賀藩の重臣達の屋敷が記されている。また、現在の佐賀テレビのある一角は百間蔵と記されており、武器庫などがあった。城内にいたる道路、城内の通路、水路、門、土塁、石垣が記されている。北の門、東の門、さらには、東裏門から本丸へ至る通路には杉と考えられる樹木が植えられている。東の門の外にある宗龍寺は南に向って門前町が開かれていた。この絵図はさらに承応3年(1654)の屋敷主を朱書きで追記している。

3. 御城内分間御絵図

分間御絵図とあるのは1間の長さを600分の1の長さ分の縮尺で作成したものである。絵図の作成については

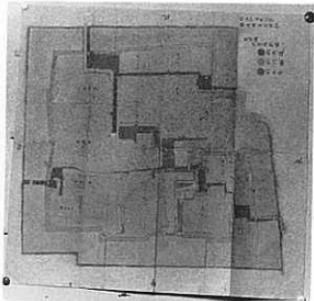
分間御絵図 寛政八辰秋御備立方 里御山方重豈吟味之次第 委細書相副 翌二月廿一日両役筋り御年寄中江相達 被達御耳候処伺之通 被仰付之旨 被仰出下り候 但 御絵図之儀者 御前被御留置 其末 翌廿八日御年寄相良權太夫殿 横尾次郎右衛門江 被相渡 里御山方江者右之段申達候様ニト有之候也。一として寛政8年(1796)に作成されたものであり、但、御堀、御土居当時欠崩之儘との注記がある様に当時の実態に忠実に描かれたことがわかる。

この分間絵図は精密な絵図で堀の長さや通路の長さを記している。北堀の長さが256間半(466m)とあり、万部島の様子も詳しく記されている。鯱をつけた門も記されているが、これは二の丸にあって現在の鯱の門とは位置が異っている。幕府に届け出た堀幅などと実際の長さは誤差があったとみて、幕府へ届け出た数字を朱書きしている。勝手に城を修復、もしくは改築したという誤解をうけない様に配慮しているものと思われる。その他、西の丸の南の櫓の構造や、各重臣の屋敷には土堀が回らしてあったことがわかる。



145.7×158.0cm

4. 肥前国佐賀城郭図



77.5×75.0cm

この図は、「明治四辛未九月、朝廷被差出候扣」と注記されている。他の前記の3図が、鍋島文庫にも同一の写しがあるのに対してこの図は残されていない貴重なものである。明治4年7月14日に、廃藩置県の詔書が出された後に、各地の城の見取図、利用状況を新政府が提出させたもの控えである。

(学芸課長 小宮睦之)

九州博物協議会講演要旨

「博物館に期待する」

佐賀新聞文化部長兼論説委員



筒井泰彦
ご紹介いただきました佐賀新聞社の筒井です。そもそも私みたいな者にご依頼があったのは、一つは地元紙の文化部に在籍しているということ、もう一つは長い間、雑誌の編集者として各地の博物館、美術館を知っているという風に想像されて指名があったのだろうと思っております。

いずれも事実でそれども、もちろん私が知っている範囲は非常に狭いし、「博物館学」とかについても何も知りません。そのことをお断りした上で、ふだん私が考えていることをお話ししたいと思います。

私の最初の「博物館」との出会いは、自分の家の二階の物置きでした。いつも重い雨戸がしまっていて、暗い。子供にとっては怖い所であり、まあ、秘密の場所みたいになっていました。

それがお盆が近づくと母親が、提灯とか先祖の肖像画、客のためのお膳とか食器とかを用意するため二階に上がるんです。で、私も後ろからついて行く。その時は雨戸も開けてあり、陽が差し込んでくる。

その太陽の光に照られた中に、ふだん目につくことのないいろんな珍しい物がある。簾笥とか長持ちとか、隅っこには糸車とか捕物に使う袖がらみたいな物が雑然と並んでいます。簾笥のひき出しをあけると、布に包まれた短刀が出てきたり——。もちろん、掛軸とか焼き物とか漆器とかが、新聞紙にくるまれヒモで結わえられて床を埋めている。

今から考えると、古い家にはどこにでもあるガラクタでしょうけれども、子供にとっては驚きの対象です。自分とは違う世界、違う

時代の物が、つい自分の頭の上にあったという驚き。それを好奇の目で見、触っている子供の姿をご想像下さい。それを私は、一番最初的な「博物館」との出会いと思っています。

本当の意味での博物館・美術館との出会いは中学三年のとき、関西へ修学旅行に行つたときのことでした。そのうちでも強烈だったのは興福寺の「阿修羅の像」の美術書か母親の雑誌か何かでこの像の写真を見て、非常にあこがれてたんですね。生意気盛りの中学生が、あの眉根にしづを寄せて思い詰めたような顔、スレンダーな姿に何か初恋の女性に似たあこがれを寄せていたんです。

その実物と対した時の感激、驚き。ほんとうはボカンと口を開けて眺めていたんでしきうが、その時の気持ちの動きは今でも覚えています。「これが本物なのか?」ほかにも法隆寺とか東大寺とか訪ねたはずですが、そんなことはちっとも覚えてなくて、「阿修羅」との出会いのことだけを強烈に印象に残している。

どうして自分の経験をことごとしく申し上げるかというと、博物館を考えるとき、自分があこがれていた、あるいは好奇心を持ち続けていた対象、物との出会いということが一番、基本的な要素ではないか、と考えるからです。そういう出会いを持ったことをとても幸せだったと思っているからです。今の仕事をするようになったのも、遠くそこに原因しているのではとまで思っています。

高校時代はまあ、人並みに受験勉強をして、京都の大学に進みました。ご承知のように京都は街自体が博物館、美術館みたいなもので、入場料をとらないお寺が私たち学生の遊び場所でした。南禅寺とか知恩院とか法然院とか真如堂とか。とにかく大きなお寺とか御所とか、京都にはゴロゴロしている。清水寺には拌觀料を払わないで済む入り口もありまして、好きな所の一つでした。

京都国立博物館でもずい分遊ばせてもらつたものです。常設展を見るぶんには、安くて済むし、よく通つたものです。むろん、いろ

んな企画展にも親しむようになり、近代美術館にもよく行ったものです。そのころはとにかくお金が乏しく、今でも図録を買っておけばよかったと思うことがあります。つい惜しんでしまったんですね。

平凡社に入社して、昭和45年に月刊「太陽」の編集部に配属されました。まだいい時代で、自分で企画を立て、ふんだんに取材費を使い、ぜいたくな仕事をさせてもらいました。日本あるいは世界の歴史や文化を紹介するという性質の雑誌で、原則として新撮をするといった方針ですから、取材担当者は毎回、いろんな本物に立ち会えたわけです。十年以上も、さまざまな博物館、美術館、個人のコレクターの所蔵される貴重な品々に直接、接することができました。物によっては手で触れることもできました。

雑誌編集の仕事に従事して、いろいろな所に旅行できたということ、いろいろな人に会って話を聞くことができたということ、いろいろな物にめぐり逢えたということが、今考えてみると、私のかけがえのない財産になっています。それが身についているかどうかはまた全然別のことになりますが、あえて申し上げれば、編集者は一般の方たちに比べると、博物館、美術館と非常に密に、特権的にお付き合いをさせていただいたということです。それは素直に喜びたいと思っています。

そして遂に8年前、「親と子の博物館200」という特集までやってきました。このネーミングは今から考えても決して間違ってはいなかつたと、やや自慢めきますが、思っています。現在の博物館は利用者に向かって、「開かれた」というイメージを持ちたがっておられる。その線に沿って私たちは既に8年前、雑誌で特集を組んでいるのです。ふだんお世話になっていた博物館に対するせめてもの恩返しという思いが潜在的に在ったのでしょうか。

そして3年前、佐賀に戻って佐賀新聞社に入り、やがて文化部に配属され、日常的にこちらの博物館、美術館とお付き合いをするよ

うになり、こうして拙い話をさせられる羽目にも陥っているわけです。

「期待される博物館」というテーマをいただいているので少し注文をつけなければと思っています。

一つは開かれたイメージの博物館も、つまるところは一般的な利用者を考えているわけですから、もっともっと積極的に普及徹底の活動をしてほしいということです。例えば、中学三年の「公民」の教科書をざっと見てみたんですが、「文化財」という言葉は出てくるんですが、「博物館」という言葉が見当たりません。あるかも知れないが目立たない。

先程私が自分の経験を申し上げましたが、一番好奇心の強い時期に、何かに出会う、そのきっかけを作ってやるためにも、「博物館」が索引に載る程度までに運動をしてもらいたいと思います。学校での、教科書中心の教育に勝る教育的效果が博物館にあるということを声を大にして言っていたいと思います。新鮮な感覚を持っている時に博物館に出会って、目からウロコが落ちる思いを多くの子供たちに経験してもらいたいと思うからです。そのような運動をどうか義務とお考えいただきたいとお願いしております。

もう一つは地域文化との関わりについてです。先ごろ、美術評論家の海野弘さんと久しぶりに佐賀で会って話をする機会を持ちました。海野さんは平凡社時代の同僚だった人で、今、売れっ子評論家です。彼は3年ほど前から意識的に地方を歩いている。文字通り歩くんですね。そして、「人は柳川、柳川って言うけど、佐賀の方が水の都にふさわしい」なんてことを言う。とにかく機会あるごとに地方に出向いて、各地の展覧会などもマメに見てるんですね。そして、それを雑誌などで紹介しているんです。そういう、一つの例ですけど、そういう視点を東京の評論家が持ち始めている時代だと思うんです。

ですから、その土地土地の、そこでしか開けない独自の企画展などにドンドン意欲的に取り組んでほしいと思います。自信をもって

企画を立ててほしいと思います。そのことがひいては、地域に住む私たちに自信と誇りを回復してくれることにもなるのです。そうなってこそ本当の「地方の時代」と言えると思います。私たちが知っているようで実は知らない郷土の事物の発掘・収集・保存・公開・研究を地道に続けていただきたい。

まあ、部外者はいろいろ無責任なことを言う訳ですが、お察しすることもあるんです。それは第一に金の問題ですね。昔、司馬遼太郎さんが「龍馬がゆく」という小説を書いた時、その資料代がある県の年間の図書購入費とほぼ同額だったという話を聞いたことがあります、「さもありなん」と思いました。自治体の予算にはむろん限度があって、ネックはお金、という話を聞くと、特に文化に関わる場合、非常に哀しくなります。どうか堂々と分捕り合戦に参入していただきて、一円でも多く博物館活動、美術館活動に役立てていただきたいと思います。

それから、常設展なんか特にそうですが、できるだけ入場料を安くして、来やすくていただきたい。あるいは曜日を限ってタダにするとか、10年ほど前、パリのルーブル博物館はたしか日曜日はタダにしていたように記憶しています。ふつうは日本円にして300円ぐらい取っていました。

また、各博物館、美術館の学芸員の人たちにもっともっと啓蒙的な文章を書いてほしいと思います。それも分かりやすく、専門用語はできるだけ使わないようにして。そういう意味で新聞を大いに利用していただければありがたいと思います。

どうも舌足らずな、まとまりのない話で申し訳ありませんでした。ご清聴、どうもありがとうございました。

＜筒井泰彦氏プロフィール＞

●佐賀新聞社編集局文化部長兼論説委員

○昭和19年5月佐賀県北方町に出生 ○京都大学法学部卒 ○昭和43年平凡社 ○昭和56年青人社設立に参加 ○昭和57年月刊ドリップ創刊 副編集長 ○昭和58年同編集長 ○昭和60年5月佐賀新聞入社

~~~~~ 美術館の ~~~~~

アンケート調査から

佐賀県立博物館・美術館が企画した「石本秀雄展」「バルビゾン派をめぐる画家たち」を観覧した人達へ任意のアンケート調査を実施して、どのような美意識をもっているかを探ってみた。その一端を紹介しよう。

石本秀雄は昭和6年22歳で東京美術学校を卒業するや、旧制佐賀県立小城中学校に赴任した。以来、県美術界のリーダーとして活躍した。昭和61年77歳で死去。石本秀雄の画業を回顧した展覧会であった。

昭和62年10月2日から10月23日迄の19日間の会期で総入館者は5,967人であった。

一般的な観覧者の美意識

(1) 石本秀雄展にはどのような年齢層が入館したのであろうか。第1位は40歳代で18.2パーセント。次いで50歳代の18パーセントであって4・50歳代の36.2パーセントで占められている。第3位は10歳代の17.8パーセントである。第4位は30歳代で14.8パーセント。第5位が60歳代で13.3パーセント、第6位が20歳代の13パーセント、そして10歳未満1.5パーセントと続いている。

ここで、50歳代が40歳代とほぼ同じ数値を示すのであって生存意欲の高さをくみとることができるであろう。まさに「壮年期」と呼ぶにふさわしいものであって40歳代と併せて考えて行きたい。30歳代が20歳代にやや数値が上まわるけれども、20歳代とともに「青年期」と位置づけられよう。12.5パーセント占める60歳代は「老年期」とは感じられない意識であって「プレ老年期」として位置づけられよう。また、4.4パーセントの70歳以上を「老年期」として位置づけたい。

さて、学生・生徒は全体の19.3パーセントを占めるが、これは生徒たちの自発的行動のあらわれというより、美術担当の教師による指導のあらわれであろう。逆に児童・小学校では生徒が展覧会の観賞することは彼らの自

発性の表現とみることができるのである。

石本秀雄展のこの統計でみる限り「社会教育施設の一つである美術館活動」を学校教育の場に吸収しようとする態度がいやが上にも表現されている。高等学校を卒業した20歳代には、高校時代より数値は落ちるけれども「自発的に展覧会を見よう」とする彼らの意志の発露が表現されている数値として受けとめられるであろう。

青年前期を迎えるまでに蓄積された美意識の潜在意識が青年前期に具体的な自我の表現がなされ、壮年期にその極を迎えるのであって、プレ老年期にその意識は継承されるものと考えられる。

また、これに性別にみると、壮年期までは「美」に対しては女性が指導型を呈する。しかし、その傾向がプレ老年期において男性指導型に転じるのである。この傾向は老年期にまで持続される傾向を示している。この現象は何を意味するのであろうか。人間のもつ本質的な「美」意識の追求が本質的に男性が女性に比して強いのであるとの表現だけではいきれないような気がしてならない。

(2) アンケートに回答していただいた観覧者は一体どこに居住しているのであろうか。50.1パーセントが佐賀市内に居住していると答え圧倒的に多い。ついで佐城地区の15.2パーセントである。三神地区と杵西地区がそれぞれ8パーセントである。東松浦地区と藤津地区がそれぞれ3パーセントである。

博物館・美術館と彼らの居住地との距離が隔たば隔たる程観覧者の数は減少していることが傾向として窺える。しかし、県外からの観覧者が9.5パーセント存在することはただ単に居住地が遠隔だからということだけでは説明がつかないようである。

(3) さて、このような観覧者はどの様な手段で「石本秀雄展」を知ったのであろうか。ニュース源として最も高いのが「新聞」であって、47.8パーセントである。第2位は「ポス

ター」であって21パーセントである。「テレビ」によるものが13.8パーセントであり、「ラジオ」によるものは2パーセントを数える。

「新聞」に依る伝達手段は、読者が読みたいと欲求する時にニュースとして吸収され意識されるのである。新聞が新聞の形態を保持する限り伝達の機能は失われないのである。その点ポスターも同じ意味をもち重要な伝達方法の一つである。また、「人からの薦めで」というのが22.5パーセントあって重要視されねばならないだろう。ただどういう内容をもつものかは知ることができなかつた。

(4) 観覧者の意識 「石本秀雄展」を観賞し終えて、内容に感動したとする人が46.7パーセント在って喜ばしいことで、逆に不満を表明した人が6.3パーセントいる—どういう不満か分らなければども銘記すべきであろう。

観覧者は美術展に何を期待しているのであろうか。全体的には68.2パーセントの者が「油彩画」を望んでいることが分る。次いで15.9パーセントの人が「水彩画」を望んでいる。「工芸」を望んだ人は6.3パーセント在る。そしてその「油彩画」は20.9パーセントの人が県内に関係のある美術家を好み、34パーセントの人が凡日本の画家の絵を好み、36.6パーセントの人が世界の名画をと希望していることが分る。

展覧会に展示される画家のうち少年期から青年前期までは圧倒的に世界の画家を好み、壮年後期から佐賀県に関係ある画家と外国人の画家の両者を同時に希望し、更にプレ老年期になると佐賀県に関係ある画家をと希求し、老年期になると完全に県内関係の画家の展覧会を望むという傾向が知られるのである。これの性別の差は顕著ではないが、女性の傾向の速度が早いことが認められる。

(専門員 木下 巧)

.....☆ ☆.....

.....☆ ☆.....

行事のお知らせ（昭和63年度）

○常設展（第2期）

() 内は団体料金

展覧会名	会期	観覧料	会場
佐賀県の歴史と文化	6月15日(水)～10月23日(日)	大人 200 (150)	博物館
特別展 梶竹倉海展	7月19日(水)～8月28日(日)	大・高生 150 (100)	博物館
特別展 檜見谷の銅鉢12本	8月30日(水)～9月11日(日)	中・小生 70 (50)	
近代の美術・工芸	6月29日(水)～9月25日(日)	(団体料金)	美術館
特別展 語りかける裸婦たち	6月29日(水)～9月25日(日)		

○企画展

美術館開館5周年記念 田園風俗画展	9月30日(金)～10月23日(日)	大人 500 (400) 大・高生 250 (150) 中・小生 150 (100)	美術館
----------------------	--------------------	--	-----

○館外・企画展

展覧会名	会期	会場
佐賀美術協会展	6月18日(土)～6月26日(日)	美術館
第13回佐賀県書作家協会展	7月5日(火)～7月10日(日)	//
第5回佐賀県写真協会展	7月13日(火)～7月17日(日)	//
第19回独立C・S展	7月20日(火)～7月24日(日)	//
東光会佐賀支部緑光会展	7月26日(木)～7月31日(日)	//
第16回七夕書道展	8月3日(水)～8月7日(日)	//
第9回九州新工芸展	8月16日(火)～8月21日(日)	//
第8回創元会佐賀県支部展	8月24日(火)～8月28日(日)	//
九州図画会第1回佐賀支部写真展	8月31日(火)～9月4日(日)	//
第20回佐賀県勤労者美術展	9月6日(火)～9月11日(日)	//
宮地亨記念展	9月14日(水)～9月25日(日)	//

—昭和63年度美術館特別企画展のご案内—

美術館開館5周年記念—田園風俗画展

会期 昭和63年9月30日(金)～10月23日(日)

佐賀県立美術館開館5周年を記念して開催するもので、江戸時代を中心とした田園生活に取材した風俗画の優品を屏風を中心に約60点展示します。



長谷川雪且筆「農耕図屏風」(部分)佐賀県立博物館蔵

佐賀県立博物館・美術館報 第81号	発行	佐賀市城内1丁目15番23号
発行年月日 昭和63年6月15日	佐賀県立博物館	佐賀県立美術館
編集出和人	印 刷	(株)大同印刷